Ungleiche Welten　Lebensbericht
Ein Tag im Spätsommer 1947　Erzählung
Wirkungen Goethes in der Gegenwart
Die Traumversammelten, Ein Brief an Rudolf Alexander Schröder,
An Anton Kippenberg, Katharina Kippenberg

ハンス・カロッサ全集 8

Carossa Sämtliche Werke

狂った世界
一九四七年晩夏の一日
現代におけるゲーテの影響
小品集

◉訳/飛鷹　節・芦津丈夫・碓井信二

臨川書店

ハンス・カロッサ全集 8

狂った世界
一九四七年晩夏の一日
現代におけるゲーテの影響
小品集

◆

飛鷹　節・芦津丈夫　碓井信二　訳

臨川書店

訳者略歴

芦津丈夫（あしづ たけお）

1930年生まれ。京都大学文学部卒業。
現在花園大学文学部教授。ドイツ文学専攻。
著書：『ゲーテの自然体験』（リブロポート）、『フルトヴェングラー』（共著、岩波書店）ほか。
訳書：ゲーテ『芸術論』（潮出版社）、フルトヴェングラー『音と言葉』、シュタイガー『音楽と文学』（以上白水社）ほか。

飛鷹　節（ひだか まこと）

1932年生まれ。愛媛大学文理学部人文学科甲卒業。
京都大学名誉教授（総合人間学部）。ドイツ文学専攻。
訳書：フーゴー・フリードリヒ『近代詩の構造』（人文書院）ほか。

碓井信二（うすい しんじ）

1933年生まれ。京都大学文学部卒業。
現在大阪薬科大学教授。ドイツ文学専攻。

『ハンス・カロッサ全集』第8巻　（全10巻）

一九九六年四月十五日　印刷
一九九六年四月三十日　発行

訳者　芦津丈夫　飛鷹節　碓井信二
発行者　片岡英三
印刷　ブラザー製版印刷工業
製本　古川製本所

606 京都市左京区今出川通川端東入ル
発行所　株式会社　臨川書店
電話（075）七二一―七一一一
郵便振替　〇一〇七〇―二―八〇〇番

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります

ISBN4-653-03128-2
〔ISBN4-653-03120-7 セット〕

R〈日本複写権センター委託出版物・特別扱い〉
○本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
○本書は、日本複写権センターへの特別委託出版物ですので、包括許諾の対象となっていません。
○本書を複写される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)を通してその都度当社の許諾を得てください。

ハンス・カロッサ全集　第8巻　目次

狂った世界……（飛鷹　節訳）1
一九四七年晩夏の一日……（飛鷹　節訳）225
現代におけるゲーテの影響……（芦津丈夫　訳）307
小品集……（碓井信二　訳）327
夢に集いし人々……329
ルードルフ・アレクサンダー・シュレーダーあての一書簡……334
アントン・キッペンベルクへ……339

カタリーナ・キッペンベルク……343
*
訳注……353
解説……372

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

狂った世界

——生活報告——

飛鷹節　訳

ドイツの宿命がついに現実のものとなってしまった、あの十二年間[1]に、親しい人々のあいだで、よくささやきが聞かれたものだ。「こんな時代に生まれなかったらよかったのに」とか「ほかの国で暮らせたらなあ」という嘆きである。そういう私も、ときおり同じような嘆息を洩らし、それを小耳にはさんだ人が少なくないはずだ。あの恐ろしい惨劇のさまざまの影響は、もう克服できたと考える人も多いが、やはりいまだに私たちにのしかかっている。このような中にあって、これから自己の生活を確立しようとする人は、あたかも大洪水が徐々に引きはじめた時のように、なにはともあれ爪先で固い大地を探りあて、しっかり踏みしめずにはいられないだろう。一歩踏み出すごとに後ろを振り返る余裕など、いまはない。しかしこれから自覚して生きようとする者は、ときおり自問しないではいられないかもしれない。「いったい私は、どのようにして、この時代を通り抜けてきたのだろう？　時代の毒は、私にも感染したのか？　その毒のおよばぬ深いところで育まれていて、これからさき成長できるのは、どういう素質であろうか？　逆に発育不全になったのは？　どのような精神が私を支え、助けてくれたのであろうか？　もっと平静な時代に生き、また理性的政治がおこなわれる国に住んでいたら、私は、自分の心にもっと誠実であっただろうか？　そして、もっとすぐれた洞察に達していたであろうか？」と。

ヒトラー運動が着々と政権への道をたどっていたころ、私の生活と活動の範囲は、政治の世界とはごく限られた面でしか触れあわなかった。新聞はよく読んだが、集会には出たことがない。選挙の日が近づくと、信頼できる人に相談して、誰に投票するかを決めた。私の内心にはゆるぎない確信があって、かくも偉大な可能性をひめているドイツ民族の発展を、いささかも疑わなかったのである。ドイツ民族が有機的な成長をつづけ、しかもそれを弾力的な忍耐と、有利な情勢のたくみな利用とによって推進していけば、世界のなかでこの民族にふさわしい地位に進むであろうと、私は確信していた。自作『医師ギオン[2]』は、医師の生活をいわば伝説として構想し、一九三一年に出版したものだが、そのなかに「街を通り抜けて」という一章がある。その最初の節に、当時の私の

気持ちがありのままに表われている。

「途方もない崩壊後にやってきた再建の日々は、諸民族にとって、りっぱに成長をとげる歳月でもあった。敗北にやどる利点を見抜いた識者、そして思慮ぶかい行動ができる精神は、いつだってごく限られているだろう。しかし大切なのは、この少数派である。多勢の人々が享楽にふけり、告発し、呪い、撹乱し、あるいは人類が今後どのように発展しなければならないか指針を掲げているあいだに、少数の精神は、しずかに未来を準備している。彼らはみんな、とっくに没落を感じとっていた。しかも今となっては、残存しているものに少しもこだわらない。そうだ、世界審判の嵐の突風も、彼らの額をさわやかにかすめていくだけだ。彼らは、いまや新しい責任を予感している。自分たちがまるで人類最後の人間であって、生命そのものを、傷つけてしまった預かり物のように、できるだけ修復した形で、創造主に返さねばならないというかのようだ。彼らは、大言壮語をつつしむことを誓った。心、愛、神、自由、英雄的行為、これらの言葉を、彼らはもはや口にすることを好まない。こうしたすべてが、さなぎとなって厳冬のふかい地底に眠っているのに、いまさら押しつけがましく口に唱えることによって、原始の荒々しい力が眠る、神聖な墓場を荒らすことになるのを恐れているのだ。彼らが実現しようとしているのは、たとえそれがささやかな事であっても、内心の声の勧めだけである。それのみが、彼らが過去の墓場の常明灯に注ごうとする油である。彼らにとっては、いまやかろうじて日常生活のなかにのみ、それもときたま、より高い世界が出現するのである。」

第一次世界大戦でまだ疲弊しきっている国民が、なにかに易々とそそのかされて、武力をもち、さらには攻撃戦によって世界のなかでの自己の地位を高めようとするだろうなどということは、誰が言おうと私は信じなかっただろう。ましてこのドイツで、たとえばアルバート・アインシュタインのような人が活躍し、ホーフマンスタール、アルフレート・モンベルトやヴェルフェルが詩作し、グンドルフ[3]やマルティン・ブーバー[4]のような人が教え、またブルーノ・ヴァルター[5]のような人が演奏するドイツで、数年を出ずして、国家によって遂行されるユダヤ人迫害を体験することになるだろう、と予言する者がいたら、私には悪質な饒舌家のたわごととしか思えなかった

だろう。

なお私の当時の状況からすると、私の個人的な目標を、すべての政治的な事件より重視せざるをえなかった。戦争と病人看護のために、旅行はずっとお預けのままだった。その旅行を遅ればせながら取り戻したいと、私はなによりも願ったのである。今日では、作家にしても芸術家にしても諸外国の知識なしには、自分がかかえているさまざまな課題を大きくふくらませ展開することはできない。新たな環境に接すると、以前に体験したことをまるで初めてのように見、その見直しのなかで、それまで読書によって得たおびただしい知識を忘れるようになる。私には、他のたいていの人たち以上に、世界の内実が欠けていた。五十歳ちかい私が、時たまようやく腰をあげ、公衆のまえで講演しようと決心するようになったが、その際に私の気持ちを決定したのは、今回出かけなければ私にはいつまでも空虚な名前でしかないような、地方や都市を知りたいという願望であった。さらに私自身のたびかさなる経験からすると、私の詩を読んでどうにも取っつきにくいと感じていた人たちでも、私が大きな声で朗読して聞かせてあげると、つかみどころのなかった詩句がにわかに感受できるようになるらしいのである。この事も、私が講演旅行に出かける動機の一つとなった。

私が訪れたどの都市にも、来客を喜んで迎える家族がいた。私たちの著作に関心をもち、作家を旅館に泊まらせたりしないで、自宅に招くのである。それは例外なく安楽な暮らしをしている人たちであった。しかしなかには、ある奇妙な興奮が私の気にかかる人たちもいた。彼らは、きっぱり言うのである。いつまでもこんな風にやっていける筈がない。たえず「足蹴にされること」にはもう堪えられない、現在の状況全体が絶望的なのだ、と。これにたいして私がすこし好い格好をみせようとして、ヴェルサイユ条約[6]にしても、すでにイギリス人たちが実行不可能だと認めかかっているし、そのうちひとりでに無効になるでしょう、またブリアンとシュトレーゼマン[7]が互いによく理解しあっているという事は、信頼がめざめつつある一つの兆しと見るべきではありませんか、などと主張すると、彼らは、まるで子供の話を聞いたように、微笑をうかべながら顔を見合わすのだった。そして言うのである、だれか救い主が現れてくれなければ、われわれ全員が破滅します、と。私のまえでこそヒトラー

の名前は口に出されなかったが、彼らが後で言っていることからすると、世界の救世主のように信じられていたのがヒトラーであることは疑う余地がなかった。

私は、医師の業務をはなれて著作の世界へ移りたかった。しかしその執拗な願いは、かならずしも皆から同意されなかった。とりわけ反対したのは私の患者たちだった。なかには私にむかって、いったいあなたは耽美主義者になるつもりなのですか、と尋ねる者もいた。その口調には非難がこもっていて、まるで私がリチャード三世[8]のように「悪人になり」たがっている、というかのようだった。そこで私ははっきりした返事をさけ、ほかならぬその非難の言葉をそのまま名誉の称号としてうけとりたい気持ちを、ひとに気付かれぬようにした。病人とその周辺の世界との交渉は、人間であるということの本質、つまり悩み、愛、憎しみ、絶望などの深淵へのなにがしかの深い視点を開いてくれてはいた。しかし今やそれだけでは、もはや私には前進しようがなかった。私を引きつけてやまないのは、日常のさまざまな偶然や錯誤を超えたところに始まる領域だったのである。さらに幼児の世界へ回帰したい、そして幼児のように、永年中断したままになっていた遊戯をもう一度とりあげてみたい、という衝動も、そのうえに加わっていたのかもしれない。「そう、ただ芸術のみが堅固で真正なのだ、他のいかなる物にもそれは認められぬ。実人生はしばしば、あまりにも惑わされとらわれているかに見える。」当時書いたこのクニッテル詩型の詩句は、もちろん冗談でもあるのだが、私にとっては冗談以上の意味をもっていた。

ミュンヒェンの街を歩いていると、有名な人物に出会うことがあった。シュテファン・ゲオルゲ、リルケ、ブルーノ・ヴァルター、トーマス・マン、ハインリヒ・マン、リカルダ・フーフ、カール・フォスラー、ルードルフ・カスナーなど、この他にも多くの人たちとすれ違ったが、面識がなかったり気付かれないまま通り過ぎたものである。ヴァランタンのような寄席の名人、魔術師オキートなども通りかかったし、また比類ない曲芸師ラステリが、公演のすんだ日にオーデオン広場を横切っていくのを見かけたこともある。世間からひろく称賛されていたこれら同時代の人たちは、それぞれの在り方や地位こそ異なってはいたが、いま想うと、みんな一様になんらかの幸福感をかきたててくれたのだった。あるイメー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジ、詩の一節、音響にあふれた一刻、舞台のふとした情景、忘れがたい言葉、優美な幻惑、重力をこえる美しい肢体の演技など、いずれもそうだった。どの人も大家であって、私にとってはひとつの神秘であり、大きな法則の枠内で限りない自由を謳歌するような別天地を代表していた。こうした人物と出会うと、いつもきまって、胸の鼓動がすこし早まった。時には患者をちょっと待たせておいて、その孤独に歩みさっていく後姿を見送ったりしたこともある。

ヒトラーを見かけることは、当時それほど格別のことではなかった。彼はよくその仲間たちとオステリア・バヴァリアとかカフェー・フュルステンホーフに坐っていたし、またその演説を聞きたければ、彼の党の集会へ行きさえすればよかった。ミュンヒェンの評議会共和制時代[9]の混沌とした状況をともに体験した者なら、人々が自分たちの幸福を政治的指導者に期待したことが、よく理解できるであろう。だからこそ人々は、新しい正当な秩序をもたらそうと誠実に努め、また国家の威厳をまもろうとしている人物として評判がたかく、さらにそのうえに国民のどの階層にたいしても地上の楽園を約束していた男を、こころから歓迎したのである。私がたまたま彼の姿を見かけたとき、ある事について想いにふけっていたのだが、不意に頭に閃いたのは、フェルトヘルンハレにおける事件[10]への、いらだたしい思い出であった。その時おそらく私は、内心こうつぶやいてもいた。あの男こそ、われわれドイツ人が絶対に戦争に負けたのではないかのように話している人物だ、彼は、彼のいわゆる「利息奴隷制」を破壊しようとしている。彼にいわせると、世界中のあらゆる不幸は、ユダヤ人に責任があるという。もちろんそんな事は、彼自身も信じてはいない。しかし彼には、あんなふうに粗暴にふるまう、特別な理由があるのだろう。――数百万人の退屈しきった人々を自分の党に引き込もうとするとき、彼は何を狙っているのか、またどんな利益がえられるのだろうか。彼の外貌には、どこか色彩の欠けたところがあった。オーストリアの国境地帯では、こうした人相は珍しくはない。ある時、マリーア広場で、ギャバジン織りの外套をきた彼が、中年の男をつれて、私の傍らを通り過ぎた。私の前方を、たまたま二人の婦人が散歩していた。その一人は、私の診察を受けにきたことがあるので、顔なじみである。二人

は立ち止まり、彼のほうを振り返った。「いまに見てごらん、あの人なにかやってのけるから」と、私の患者が言うのが聞こえ、おもわず私も同じように顔を振り向けたい誘惑を感じた。彼女は一種の硬直状態におちいって、彼のうしろ姿を見送っていたが、私の気付いたところでは、その視線はうっとりと、うるんでいた。どういう連想だったか、聖書のなかのロトの妻[1]のこと、彼女が塩の柱に変身したことが、私の頭をかすめた。私は振り返るのをやめ、さきを急いだ。

そのあと市電を待ちながら、彼が大衆にむかって彼の集会に参加するよう呼びかけている、真っ赤なプラカードの一枚のまえに立って、その宣伝文を読んだ。めらめら燃えるような、けたたましい、人をいやおうなく殺人的な憎しみへ駆り立てる彼の文章は、いかなる健康な思考にも堪えられるようなものではない。私はその時はじめて、あの色彩の欠けたような感じは、ニトログリセリンあるいは硫酸のそれにちかいことを直感したのだった。私は、こうしたすべては自分とは無関係だと思った。およそ判断力のある人間なら、絶対にこの男から幸福を期待するはずがない、とも思った。私はまんまと錯誤してしまったのである。ところでわれわれは、公共にむかって語りかけ、文章を書く人に接するとき、その人がどういう心の持ち主たちにむかって呼びかけようとしているのか、尋ねてみようとするものである。そこでじつに不気味だったのは、教養があり、人間性もゆたかだと思ってきた身近な友人たちが、ヒトラーのあの一語ごとに誇張する、あいまいな常套的表現にいかれてしまい、ゲーテの肺腑からでた言葉や、ヘルダーリンのヒュッペーリオンに接したときと同じような感動をおぼえているかに見えたことであった。私の診察時間に、だれか病人の処置をしているあいだ、外の待合室に新しい患者たちが押しかけてきたときなど、彼自身がそのなかにまぎれ込んできたのではないか、と錯覚するようなことも起こった。これは不快な考え方であったが、しかしじつはこの想いこそが、そのころ内心では逃げだそうとしていた、医師という天職のありがたさを実感させてくれたのである。小さな待合室を支配していたのは、しばしば嘲笑されているヒューマニティーの天使だったのであり、この天使に支えられて、私は個人感情をすべて克服できたのであった。かりにヒトラーがやって来ても、私はただ自明のこ

ととして、全力をつくし、良心の命じるところにしたがって、その不気味な客人を、ほかの患者とおなじように治療したことであろう。しかし彼は来なかった。

私の数少ない、小さな著作は、さいわいスイスでも読者を得ていた。とりわけホッティンゲンの読書サークルが私には重要だった。このサークルをとおして、私はスイスとつながりを持つようになったのである。スイスでは人々はより冷静で、より平衡感覚をもっていた。極端な言葉もめったに聞こえてこなかった。しかも、容器に水をいれておくと、その表面に油膜がはりつめるように、スイスでは、冷静で勤勉な市民層のうえに、自由闊達な精神の層がたなびいていて、これが、このうえなく多方面の多くの才能ある人たち、詩人や芸術家、さらに思想家、研究者、新しい教えの予言者などを引きつけていた。スイスはまた、われわれドイツ語圏のもっとも深遠な詩の天才たちの避難所、死に場所にもすでになり始めていた。一九二六年以来、リルケの亡骸は、ラロン村の険しい断崖のうえに眠っていた。その後まもなく、シュテファン・ゲオルゲもロカルノで臨終のときを迎え、またアルフレート・モンベルトも、迫害を逃れてヴィンタートゥアに避難し、もうほとんど期待していなかった安らかな死をむかえることになったのである――モンベルトのこの地上での最後の運命については、いずれ本書で述べるつもりである。

その頃のスイスの友人たちのなかに、マルティン・ボートマーやヘルバート・シュタイナーもいた。いずれも雑誌『コローナ』[12]への私の寄稿をとおして交友が結ばれた友人である。ほかにローベルト・フェージ、エードゥアルト・コローディ、フリッツ・エルンスト、そしてエマーヌエル・シュティッケルベルガーなどがいた。これらの友人たちは、私の生き方、在りように根本的な親しみを覚えたらしく、そのことをたいへん好意的な仕方で表明してくれた。マルティン・ボートマーによって設立されたゴットフリート・ケラー賞を、私に授与するよう取り計らってくれたのである。この栄誉は、私の数少ない細々とした著作にたいする承認だとは、とうてい考えられなかった。私の歩みは、けっして将来の広範な成功を期待させるものではないが、それでもその一筋の道を根気よく歩み続けるようにという励まし――これがあの授賞

だったのだと思う。チューリヒの仲間たちのつよい希望で、私は、相互の共感のしるしとしてのこの賞を、美しいムラルト荘園でマルティン・ボートマーの手からじきじき受け取ることになった。こうして私は喜ばしい気分で旅立ったのだが、このスイス旅行は、いくつかの理由から私の脳裏にふかく刻まれることとなった。

チューリヒで朗読の夕べの祭典が催されたとき、私は二つの招待をうけた。最初は学生たちのたっての希望で、レザーンまでさらに足を伸ばし、ヴォーティエ博士が所長であった大学診療所で――たぶん今日もなお博士はその役職についておられるはず――彼らの病気療養中の友人たちにいくつかの作品を朗読してほしい、というものであった。この小旅行のことを聞きつけたのが、チューリヒ湖畔マイレン在住のナンニー・ヴンダリー夫人、リルケの女友達、庇護者、そして最後には看護人でもあったひとである。夫人は、ヴェルナー・ラインハルトの同意を得たうえで、この小旅行の帰りに、ヴァリス州のミュゾットの館[13]に立ち寄るよう説得してきた。あの塔のような小さな館は、『ドゥイノの悲歌』の作者リルケのおかげで、きよらかな名声を得ている。小旅行をこのようなかたちで終えることは、このうえない意義を旅に与えてくれるはずだ。私はありがたくお受けすることにし、その翌々日の夕方にははやくも、アプト式軌条鉄道で、湿った雪の渦巻くなかを、山上の小さな町レザーンに到着した。

ヴォーティエ博士の根本的な考え方は、チューリヒでの対談をとおして判っていた。博士が主張しておられるのは、治癒可能な結核にかかった教授や学生たちに、合理的な時間配分によって、治療とあわせて研究をつづけるチャンスを与えることであった。この試みは、医師としての私にたいして訴えかけずにはいなかった。なにしろ私の日々の仕事は、永年にわたって、そうした結核患者を治療することだったからである。患者たちは、実生活上の活動をかなり長期にわたって中断すると、経済的困窮におちいってしまう。そのうえ愛着のある仕事を諦めることは、かならずしも治癒を促進することにはならない、という観察は、私が何千回となく確認してきたところである。この大学診療所では、たいていの療養所に忍びよってくる郷愁、実生活からの疎遠感は現れていなかったし、また長期疾患にかかった者ならみんな知って

いる貧困化への怖れも、このように熱心に勉学、実習、準備が行われている病室へは、いわば立入り禁止であった。私は、療養所の建物にはじめて足を踏み入れたときから、良い雰囲気を感じた。光線ゆたかなアルプスの空気のなかで、思慮深い医師に見守られながら、障害を克服しようという希望にもえている若者たちは、私にとっては無縁の人ではなかった。彼らのほうも、私を仲間内の人間として迎えてくれた。私は小広間で朗読し、さらに翌朝、ベッドに寝たっきりの重症者たちを、その部屋に訪ねた。

小広間の聴衆のなかに、そのころ全文化界の空想力をかきたてた人物がまじっていた。成層圏の研究家オーギュスト・ピカール[14]である。ヴォーティエ博士が学術講演を依頼して招いたのだが、その講演原稿にさらに何日か手を加えたいとのことで、残念ながら私自身はその仕上げられた論述を聴くことはできなかった。ピカール氏は、つい最近、ある気球の気密室に乗り組んで、彼以前にはまだ誰も昇ったことがないほど地表高く上昇し、高空放射線と大気帯電状態を測定していた。そして今、もう一度上昇の準備をしているとのことであった。

昼食前に、彼はいっしょに散歩に出かけようと誘ってきた。三人の学生が私たちと同行した。ピカールは、身長が並はずれて高いのに、繊細な体質で、やせ細っていた。この療養所で、彼について何も知らずに彼と出会った人は、ヴォーティエ博士の治療を必要として訪ねてきた患者の一人だと思ったかもしれない。私たちは、ローヌの谷間をはるか下に見おろす、日差しのあかるい、うっすら雪のつもった高原を散策した。私は、このような大空はついぞ見たことがない、と思った。銀の糸のような雲が、網の目に編まれたまま、くろずんだ青空をゆっくり流れていく。遠くの山脈は、中腹のあたりまで、真っ黒の霧の壁にとざされている。おそらくあの霧は、下界はるかかなたの土地にまで、雨をおくりとどけるのだ。その上方には、ダン・デュ・ミディの氷壁がきらめき、ときおり下方のローヌ河の水流の輝きが立ちのぼってくる。そのゆったりした谷間では、亡き詩人リルケが、私をやさしく待ち受けていてくれるはずだ。それはともかく、今は、生きている人物とならんで散策しているのだ。これは素晴らしいことであった。彼は、じつに冷静に、高空ですごした数時間のことを話してくれた。すべての

峰々や渓谷のはるか上方、本来なら命を失うところだが酸素補給によって窒息だけはまぬがれた、高空圏での一刻である。もはや雲も嵐もおよばない、星が夜ばかりか昼間も見えつづけている、そして希薄な大気中であらゆる乗り物が不気味なほど速く動く、そういう領域に到達するとき、人間はおそらく永遠性というものを予感せずにはいられないだろう！

そのすこし前、私はある著作を手に入れていた。表題は『宇宙への突進』、著者はミュンヒェンの学者、M・ヴァリエー[15]である。彼は、老ジュール・ヴェルヌが夢見たユートピアを本気で実現しようと思い立ち、自由時間をすべてあてて、宇宙船の建造にとりくんだ。ロケット噴射によって推進力をえて、地上の重力圏を脱けだし、時間と位置を精密に計算しながら月面に着陸しようというのである。現代という時代は、不可視なものをよりどころにした信仰はすべて一笑に付してしまうが、技術の相のもとに出現してくるものならどんなことでも歓迎する。そういう時代風潮のせいで、このじつに冒瀆的な計画を本気でうけとめる人たちがたちまち集まり、第一回月旅行を決心した志望者が、すぐさま数百名も予約登録したのだった。しかし、この月旅行は実現するにはいたらなかった。あの大胆不敵な発明家が、じつは平坦な地上で、ごく日常的な自動車事故のために死亡してしまったからである。

私たちはレザーンの高原を歩きまわった。そのあいだに私が深く感銘をうけたのは、あの宇宙冒険家とピカールのような人物との歴然とした相違であった。一方は、私たち地上の子にとっては楽しい詩人の夢想であるものをがさつな事実にしようとするのであり、いわば腕白の無鉄砲さがあるばかりだが、他方は、一歩ごとに検証しながら前進し、さまざまな計画のゆきすぎを断念しようとしていて、あくまで科学的な冷静さに徹している。私は、月を愛してはいるが、断然スイスの研究者のほうに引きつけられた。これは、私が熟年の域にはいったためばかりでなく、私の本来の素質にもよるのであろう。

昼食後、私が泊めてもらった部屋に戻ってみると、そのあと引っ越してくることになっているピカールの小さな荷物が、はやくも机のうえに、遠慮がちに置かれていた。私は、療養所に住んでいる人たちに、患者も健康な人もふくめ全員に別れを告げて、旅行をつづけた。小雨

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com